

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 殿

福岡県病虫害防除所長

平成 26 年度病虫害発生予察特殊報第 1 号について

このことについて、本県でキウイフルーツかいよう病の新系統を確認しましたので病虫害発生予察特殊報第 1 号を発表し、送付します。

特殊報第 1 号

- 1 病虫害名 キウイフルーツかいよう病（新系統）
- 2 学名 *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae*
- 3 発生物種 キウイフルーツ
- 4 発生の概要と経過

平成 26 年 4 月、県内のキウイフルーツ栽培園において、葉の斑点、花蕾がく片の褐黒変（写真 1）、花房・新梢の枯死や樹液の漏出（写真 2）の症状が認められた。

農林業総合試験場病虫害部で本症状が見られる部位から細菌を分離し、PCR 法及びアピ同定キットで診断したところ、キウイフルーツかいよう病であることが判明した。その後、独立行政法人農業生物資源研究所に同定を依頼した結果、キウイフルーツかいよう病の新系統（Psa3 系統）であることが確認された。



写真 1 葉の斑点と花蕾がく片の褐黒変



写真 2 新梢の枯死と樹液の漏出

5 国内での発生状況

キウイフルーツかいよう病新系統（Psa3 系統）は平成 26 年 5 月に国内で初めて愛媛県で発生が確認されている。

なお、キウイフルーツかいよう病の従来系統については、神奈川県、静岡県、愛媛県、佐賀県など既に広く発生しており、福岡県においても昭和 62 年に発生が確認されたが、その後、本県での発生は確認されていなかった。

6 技術対策

キウイフルーツかいよう病は早期発見に努め、別紙を参照に適切な対策を講じることが必要である。

「キウイフルーツかいよう病」について

○ 病徴

葉

- ・ 4～5月ごろ、明瞭な淡黄色のハローを伴った不整形の褐色病斑を生じる。大きなハローを伴わない小さな病斑の場合もある。
- ・ 夏季の高温下では葉の病勢は衰え、病斑は見にくくなる。

枝幹

- ・ 樹液が流動する2月頃から、枝幹（芽の周囲、葉の脱落痕、負傷部、せん定痕など）から白濁した菌泥や赤褐色の樹液が流れ出す。血が流れ出たように見える。

花

- ・ ガクが褐色～暗褐色に変色。ガクが侵されると花弁が淡褐色に変色。

⇔ 花腐れ細菌病の場合は花弁や雄しべも褐変する。



〔葉の病徴〕



〔花の病徴〕



〔枝幹の病徴〕

生態

病原体：バクテリア（細菌）

感染時期：・早春～初夏（3～5月）、秋～初冬（10～12月）
・増殖適温：10～20℃

伝染方法：・伝染源は罹病樹から流れ出す菌泥で、春や秋の強い風を伴った降雨により飛散する。葉や新梢から感染し、周囲の樹、園地へ拡大する。
・その他 樹体の接触による傷口感染
ハサミなどの器具の使い回し
罹病樹から採取した穂木の接ぎ木
罹病苗木の持ち込み
・土壌伝染はしない。

発生しやすい条件：・春と秋の風当たりが強い。
・寒気が停滞しやすい。
・秋の冷え込みが早く春が遅い。

考えられる被害：

- ・「レインボーレッド」や「ホート16A」などは本病の影響を受けやすく、数年で枯死することがある。
- ・「ハイワード」では、枯死しにくいのが、減収などの影響が出る。

○ 防除対策

- ・一度感染すると根本的な治療方法は無い。発病樹は伐採する。
- ・健全な苗木、穂木を使い、菌を侵入させない。
- ・ノコ、ハサミなどの作業器具の消毒
- ・生垣やネットによる防風対策
- ・薬剤防除は、抗生物質・銅剤などの登録はあるが、感染しないように予防的に使用する。

疑わしい症状を発見したら、

速やかにJA、普及指導センターへ連絡を！！